



「スマホ育児」の是非

NPO法人子どもとメディア代表理事

清川 輝基さん



きよかわ・てるもと 宮崎県高城町(現都城)出身。1964年、NHKに入局。長野放送局長、NHK放送文化研究所研究主幹などを務める。2004年、NPO法人子どもとメディアを創設。子どもとメディアに関する調査研究や提言を行う。75歳。

乳幼児の発達機会奪う

乳幼児は自分で育つ環境を選ばせません。保護者が子どもを長時間にわたり電子機器に接触させる「ネット漬け」にすることは、健全に発達する機会を奪うという意味で虐待といえます。乳幼児の健康に与える影響について、もっと深刻に受け止める必要があると思います。

追いかけて、プランコや滑り台で遊びながら、こうした機能を身につけていきます。一方、発光ダイオード(LED)で光る端末の画面を、20〜30秒の至近距離で長時間見続けるとしても、眼球を動かしたり焦点を合わせたりする訓練にならないばかりか、視力に悪影響を与えかねません。

また、男女とも平均寿命が80歳を超え、これまで以上に、子どものころから足腰を鍛えることが大切になっています。感覚機能や筋力、体温や血圧を調節する自律神経系など、生きるために必要な基礎的な能力の発達には、スマホ育児では得られません。

赤ちゃんは手足を動かさず、表情を変え、泣いたり笑ったりして自分の欲求を一生懸命、親に伝えます。親は赤ちゃんを見つめ、声をかけ、抱きしめ、どうしてほしがっているかを考えて対応します。こうしたやりとりを繰り返して、親密で信頼感のある親子関係がつけられるのです。

子どもは安定した親との関係を土台に、成長しながら少しずつ他者との関係を広げ、社会性を育んでいきます。親がスマホを見ながらミルクや食事を与えたり、泣いた子どもを抱かずにスマホの画面を安易に見せてあやすことも、子どもの心の発達にとってよくありません。そもそも親が端末の操作に夢中になってしまったり、子どもへの注意や安全への配慮がおろそかになり、事故に遭う危険が高まってしまいます。

電子機器を子どもに長時間使わせる弊害や適切な使い方を知ってもらうには、自治体が1歳6カ月児や3歳児の健診で親に伝えたり、保育園や幼稚園、学校で保護者向けに講演会を開くことで効果が上がります。これらの機関の責任者と保健師、学校医やPTAなどが協力して取り組むことが大切です。(生活部編集委員 中村康利)

と昔前と比べて今の時代 便利になりましたね。

便利なモノにあふれています。と言ってもその時代を知らない世代の人にとっては今が当たり前ですね。

と昔とは50年かな!!

「便利さの陰に落とし穴あり!」といわれます。

沢山ある中で前から気になっていたのが「紙オムツ」です。

ママは楽で赤ちゃんは快適です!

昔の赤ちゃんは生後12ヶ月前後で「オムツ」を卒業してました。排泄も自分でコントロール出来たんです。

不便さが育てた赤ちゃんの力ですね。

楽しかった連休が終わって本格的な自給自足の生活のはじまりです。年長児たちと年中児たちと新しい言葉と取り組みがすてにはじまっています。年少児たちにとって、うほみ組のおとさたちにとっても、これと違って変化に富み刺激のある生活に入ります。園生活の楽しさを毎日に感じてきて、仲よしも増えて来ます。体調を整えてあげてお休みしないようにしましょう♡

■年少児のドリルは「あ」から「ん」までを読むように。そして書きは直線の「一」「丨」から「二」「三」...「十」へと進み、直線の多いカタカナを習得しながら筆圧を身につけます。やがて曲線の多いひらがなへと進みます。合わせて絵本の読みへと進みます。

一日に15分から20分と短い時間ですが大きな実りと集中力を身につけて行きます。「レベルアップ」を常に意識しながら取り組みます。温かく見守ってあげてください♡



■すてに年長児たちのハーモニカがはじまっています。とても難しい楽器です。年長児たちに「やる気」と「聞く力」が無ければ習得できません。

吹いて出す音と吸って出す音があります。唇を数ミリ左右に移動させただけで音が変わります。年長児たちは年少児 年中児としてこれと「やる気」と「聞く力」を育ててきました。

これからは更にこれと磨きかけ集中力を加えて挑戦して行きます。

■うほみ組の午後保育がはじまりました。これからの園生活で大きな成長が期待できます。変化に富む生活になります。おとさたち、なによしが増えていきます。楽しさいっぱいの園生活になります♡

小さなコンピュータをフル回転させて音を追います。12月、教文館のステージイベントの「喜びの唄」を104名で合奏します。圧巻です!